

シヴァとスサノヲ——その奇妙な類似について

Siva and Susanowo: Some Strange Resemblances

沖 田 瑞 穂

要 旨

ヒンドゥー教の主神の一人シヴァと、日本のスサノヲ神には、八つの点で特徴的な類似が認められる。

1. 破壊と生殖：シヴァは時が来ると世界を破壊する破壊神であり、スサノヲはその行動によって世界を危機にさらす。他方、シヴァはリングに表されるように生殖の神であり、スサノヲは豊穡の地下界と一体化して、豊穡神オホクニヌシに試練を課す。
2. 〈教示する神〉：シヴァはインドラの欲望を戒め、スサノヲはオホクニヌシを試練によって導き祝福を与える。
3. 悪魔退治と武器：シヴァは悪魔の三都を破壊し、英雄アルジュナに武器を授ける。スサノヲはヤマタノヲロチを退治し、それによって得た剣をアマテラスに献上する。
4. 荒ぶる神・罰・(宥め)：英雄神であると同時に両神は荒ぶる神でもある。
5. 暴風神：シヴァの前身ルドラは暴風神、スサノヲも自然現象としては暴風雨。
6. 文化：シヴァは踊り、スサノヲは歌と関わり、世界のエネルギーを表す文化と関連する。
7. 女性的なものとの一体化：シヴァはシャクティとして妃と一体化し、スサノヲは冥府の主であることによって母神イザナミと一体化している。
8. イニシエーションを授ける：シヴァはアルジュナに、スサノヲはオホクニヌシに。

このように多くの類似を有するが、両神の間に何らかの系統的關係は想定できず、自然現象としての暴風に基づく神格として、別個に形成された性質が偶然に一致したものと考えられることができる。

キーワード

比較神話, インド神話, 日本神話, シヴァ, スサノヲ

はじめに

日本女子大学における2015年度前期のテストで、英文科の青木奈々さんが大変すぐれた答案を提出した。本人の了解を得て、名前と、答案の全文を引用する。

「インド神話について学んだことを述べなさい」という設問に対して「数ある神話の中でも特に興味深いのがシヴァの神話についてだ。彼は破壊の神である一方、生殖の神として民衆の間で広く信仰されており、大きな役割を果たしている。欲望が止むことのないインドラを戒めたり、神々を困らせる悪魔の退治に不可欠な人物であったり、英雄のように描かれている。しかし、そんな彼も怒りに任せて暴れ回り、神々から罰を受けたり、宥められたりしている。ここに、日本のスサノヲが連想された。彼もヤマタノオロチを倒して村娘を救い出すという英雄ぶりを見せているにも関わらず、太陽の女神アマテラスを引きこもりに追いやる事件を起こしている。この共通点から人々は完璧ではない少し人間味のある姿を神に求めていたのだと考えられる。また単一の特徴を持ち合わせているのではなく、対照的な面を持ち合わせているというのも魅力の一つである。」

以上のような指摘に、沖田の見解を加え、シヴァとスサノヲの対応を示す以下のような表を作成した。本稿では、この表に基づいて両神の神話を取り上げ、その類似について考えていく。

	シヴァ	スサノヲ
1 破壊と生殖	1-a 世界を破壊 1-b リンガ崇拜・生殖の神	1-c 高天原昇天・岩屋籠り 1-d 生殖の神・オホクニヌシの祖先
2 〈教示する神〉	2-a インドラの欲望を戒める	2-b オホクニヌシに試練を与え、祝福する
3 悪魔退治と武器	3-a 三都の破壊 3-b アルジュナに武器を与える	3-c ヤマトノヲロチ退治 3-d 武器を発見・アマテラスに献上
4 荒ぶる神・罰・(宥め)	4-a ダクシャの供犠／弓が折られる／宥められる	4-b 高天原での悪戯／爪などを切られて追放
5 暴風神	5-a 前身ルドラは暴風神	5-b 暴風雨神
6 文化	6-a 踊り	6-b 歌
7 女性的なものとの一体化	7-a 妃たちとシャクティ	7-b 母・姉・娘への執着
8 イニシエーションを授ける	8-a アルジュナに	8-b オホクニヌシに

1. 破壊と生殖

シヴァ1-a 世界を破壊

ヒンドゥー教の三神一体説・トリムールティにおいて、ブラフマーが世界を創造し、ヴァイシュヌがその世界を維持し、最後にシヴァがその世界を破壊する。この時シヴァは黒い姿をしているので、Mahakala「大黒」という名で呼ばれる。

シヴァ1-b リンガ崇拜・生殖の神

シヴァの象徴が男性の生殖器・リングであることはいうまでもない。

スサノヲ1-c 高天原昇天・岩屋籠り

スサノヲはイザナキの鼻から生まれてすぐに、泣き喚いて世界を危機に

さらす。次に、大騒動を引き起こしながら高天原に昇り、その後アマテラスの岩屋籠りを引き起こすことで、三重に世界を危機に陥れている。

スサノヲが生まれた直後の様子は、次のように記されている¹⁾。

その泣く状は、青山は枯山如す泣き枯らし、河海は悉に泣き乾しき。
ここをもちて悪しき神の音なひ、さ蠅如す皆満ち、万の物の妖悉に
発りき。

スサノヲはイザナキに追放されると、姉のアマテラスに会おうとして高天原に昇っていく。その様子は、「山川悉に動き国土皆震りき」(『古事記』)と語られており、世界を危機にさらしながら昇天している。

アマテラスがスサノヲの度の過ぎた悪戯に怒って岩屋に身を隠すと、世界は暗闇に閉ざされ、異変が起こる。その様子は、以下のように記されている。

ここに高天原皆暗く、葦原中国悉に闇し。これによりて常夜往きき。
ここに万の神の声はさ蠅なす満ち、万の妖悉に発りき。

スサノヲ1-d 生殖の神・オホクニヌシの祖先

『古事記』でスサノヲはオホクニヌシに至る系譜を開く。オホクニヌシはスサノヲの六世の孫とされる。『日本書紀』本文ではスサノヲの子とされる。スサノヲの系統を引くオホクニヌシは美しい容貌の生殖と生産の神である。オホクニヌシはスサノヲのもとを訪れることで、生産の力を手に入れる。そのことは、古川のり子によって次のように述べられている²⁾。

戦士の機能の神の代表者としてのスサノヲは、生産者的機能の神の

代表者オホナムチに、その役目を果たすのに必要だった戦士の力を与えた。しかしまた一方で、それまでは不毛な死の国（黄泉の国）として存在していた根の国は、オホナムチの来訪によって、彼を「オホクニヌシ」に成長させ地上に生み出す働きをすることになった。そのことでオホナムチもまた彼に本来そなわっていた機能の力によって、根の国＝イザナミの生産力を賦活させたのだといえよう。そしてそれによって生産力をより高くした豊かな大地が、このあとのオホクニヌシの国作りの基盤となるのである。獲得した大刀と弓矢を振るってオホクニヌシは兄弟の神々を追い払い、地上でのスサノヲの仕事の跡を引き継いで、いよいよ国作り——中つ国の秩序化の事業を開始することになる。

1の類似

神話において、破壊と生殖、死と生は表裏一体のものとして表される。スサノヲは自らの行動によって世界を危機にさらし、シヴァは時が来ると世界を破壊する。一方でシヴァは生殖の神でもあり、スサノヲは冥府の主として豊穡神オホクニヌシにイニシエーションを課す。この時のスサノヲは、冥府、すなわち地下という豊穡の源である場所と一体化していると言える。

2. 〈教示する神〉

シヴァ2-a インドラの欲望を戒める〈教示する神〉

シヴァの〈教示する神〉としての役割は、H・ツインマーやJ・キャンベルなどによって好んで取り上げられた、「インドラの宮殿」（『ブラフマヴァイヴァルタ・ブラーナ』）とよばれる神話によく表れている。

悪竜ヴリトラを退治したインドラは、自分の武勲にふさわしい立派な宮殿を建てることにし、神々の工匠ヴィシュヴァカルマンに、宮殿の造営を命じた。ヴィシュヴァカルマンは早速工事に取り掛かり、壮麗な宮殿を造り上げたが、インドラの要求はどこまでも膨張し、ますます立派な宮殿を建てるように望み続けた。終りのない仕事に、たまりかねたヴィシュヴァカルマンは、ブラフマーのもとへ行き、助けを求めた。するとブラフマーは、ヴィシュヌのもとへ赴いて助けを請うた。

翌朝、インドラの宮殿に、十歳ほどのたいへん美しい少年がやって来た。広間に招き入れて丁重にもてなしながら、訪問の理由を訪ねると、少年はほほ笑みながらこう言った。

「神々の王よ、私はあなたが造らせている御殿のことで、質問したくて参りました。この建物が完成するまであと何年必要で、ヴィシュヴァカルマンはどれだけの仕事をしなければならないのですか。あなたの前には、これほど立派な御殿を建てさせた神々の王はいなかったのに。」

インドラは、少年の姿をしたこの客人が、自分の前にいた王たちのことを知っているような口をきくのを、不思議に思った。その時、彼らが対話していた王宮の広間に、無数の蟻が列を作って入ってきた。少年はそれを見て声をあげて笑ったが、すぐにまた口をつぐんだ。インドラはこの少年の挙動に対して、言葉にしがたい神秘を感じ、「なぜ笑ったのですか。私を欺くために少年の姿をしているあなたは、一体誰なのですか」と尋ねた。

少年は、「私が笑ったのは蟻を見たからです。しかし、なぜ笑ったのか、その理由は聞かないでください。なぜならそれは、世にも恐ろしい秘密だからです。」

これを聞いて恐れにかられたインドラは、へりくだって、その秘密を自分に教えてくれるように頼んだ。少年は言った。

「さっき見た蟻の行列の中の、一匹一匹の蟻は、全て、前世で一度は神々の王であった者たちなのです。あなたと同様に彼らも一度は、徳高い性質のゆえに、一度は神々の王位についていたのです。ですがそのあと、多くの命を繰り返して生きるうちに、皆、蟻になったのです。」

この言葉を聞いたインドラは、それまで輝かしい栄光に包まれていた自分が、無にも等しいほど小さな存在になったかのように感じられた。

その時、広間に、一人の異様な人物が入ってきた。その人物の頭はもつれた長い髪の毛で覆われ、腰にカモシカの皮を巻き付け、苦行者の姿をしていて、胸には円形の胸毛の茂みが生えていた。その胸毛は、茂みの周辺部はすさまじく密集していたが、中心部はすでに多くの毛が抜け落ちてまばらになっていた。不思議に思ったインドラの代わりに、少年が苦行者に素性を訪ねた。苦行者は答えた。

「私はインドラさまにお目にかかりに参った、無名の苦行者です。自分の命のはかなく短いことを知って、家も仕事も持たず、結婚もせず、ただ施しだけに頼って暮らしております。私の胸毛は、大きな知恵を教えてください。胸毛の一本が抜けるごとに、一人の神々の王の世が終わります。すでに胸毛の半分はなくなりましたが、残りが抜けると、創造神ブラフマーの命が終わり、私も消滅しなければなりません。こんな短い生涯で妻や子や家を持つことが、なんの役に立つのでしょうか。一人のブラフマーに割り当てられている命の長さは、ヴィシヌ神のまばたきの間にすぎません。ましてやブラフマー以下の神々も人間も、泡のように生まれては消えるだけなのです。」

語り終えると、苦行者は見えなくなった。この苦行者こそ、シヴァ

神にほかならなかった。同時に少年の姿も消えた。彼こそがヴィシユヌだったのだ。あとに残されたインドラからは、宮殿をもっと立派にしたいという欲求は、すっかり失われていた。インドラはヴィシユヴァカルマンを呼び、これまでの苦勞の報酬として多くの贈り物を与えて帰らせた。

その後、インドラは妃のシャチーと協力して、神々の王の務めを立派に果たすようになった³⁾。

スサノヲ2-b オホクニヌシに試練を与え、祝福する〈教示する神〉

オホクニヌシが、兄である八十神の迫害から逃れるため、祖先のスサノヲのいる根の国を訪れ、迎えに出てきたスサノヲの娘スセリビメとその場で結婚すると、スサノヲはまずオホクニヌシを、蛇の部屋に寝かせる。オホクニヌシはスセリビメからもらった^{ひれ}比礼を使って蛇を鎮める。次の夜は、ムカデと蜂の部屋に寝かされるが、同じようにして無事に出てくる。次にスサノヲは、鏑矢を野の中に射込んで、その矢をオホクニヌシに取りに行かせると、野に火を放って焼いてしまう。オホクニヌシは地面の下の穴に入り込んで助かる。最後の試練はスサノヲの髪の毛を取ることであるが、オホクニヌシがスサノヲの頭を見ると、ムカデがたくさん群がっている。オホクニヌシが、スセリビメからもらった^{くわ}棕の実と赤土を使って、ムカデを喰いちぎって吐き出しているように見せかけると、スサノヲは安心して眠ってしまう。オホクニヌシはその間にスセリビメを背負い、スサノヲの宝である^{いくたち}生大刀・^{いくゆみや}生弓矢・^{あめのりごと}天詔琴を持って逃げ出す。気づいたスサノヲが追って来るが、ヨモツヒラサカまで来ると、オホクニヌシにこう言って祝福して地上に送り出す。

その^な汝が持てる^{いくたち}生大刀・^{いくゆみや}生弓矢をもちて、^な汝が^{ままあにおと}庶兄弟は^{みを}坂の御尾に追ひ伏

せ、また河の瀬に追ひ撥^{はら}ひて、おれ大国主神となり、また宇都志国玉神^{うつしくにたまのかみ}となりて、その我が女須世理毘売^{あむすめむかひめ}を嫡妻として、宇迦の山の山本に、底つ石根^{いはねみやばしら}に宮柱^{みやばしら}ふとしり、高天原^{たかまのはら}に水椽^{ひき}たかしりて居れ。この奴^{やつこ}。

2の類似

シヴァもスサノヲも、インドラやオホクニヌシの上位に立つ神として、戒め、祝福などを行い、〈教示〉の役割を共通して果たしている。

3. 悪魔退治と武器

シヴァ3-a 三都の破壊

ブラーフマナ神話に、ルドラからシヴァへの過渡期を確認できる、三都破壊の話がある。アスラたちは鉄・銀・金よりなる三つの城塞を持っていた。神々はそれを攻略するため、火神アグニを鎌とし、神酒ソーマを穴とし、ヴィシュヌを棹として、ルドラが矢を放ち、三都を破壊してアスラたちを駆逐した⁴⁾。

この話は、ヒンドゥー教においてシヴァによる三都破壊の神話に発展する⁵⁾。

アスラのターラカの三人の息子らは、苦行によってブラフマー神より恩寵を授かり、三つの都市に住んで世界を支配するという願いを叶えてもらった。ただし千年後に三つの都は一つになり、その三都を一矢で貫けるような神によって滅ぼされるということであった。願いを叶えられた三人のアスラは無敵となり、世界中を苦しめた。神々はシヴァ神に、すべての神々の半分の力を預け、そこにシヴァ自身の強大な力を加えて、ブラフマーを御者として戦車に乗り、ヴィシュヌとソーマとアグニによって作られた矢を持って悪魔の都へ向かった。す

ると三つの都は一つに合体した。シヴァはそれを一矢で貫いて、三都を焼き尽くした。

シヴァ3-b アルジュナに武器を与える

シヴァは『マハーバーラタ』の英雄アルジュナに、ブラフマシラスという必殺の武器を授ける。この話については、後述8-aを参照。

スサノヲ3-c ヤマトノヲロチ退治

スサノヲは頭と尾が八つに分かれている巨大な蛇を退治し、蛇の犠牲になるところであったクシナダヒメと結婚する。退治に際しては、酒を造らせて蛇がその酒を飲んで酔って眠ったところを剣で切り殺している。多頭の蛇、あるいは竜は神話において原初の混沌を表す。混沌とした地上世界を、混沌の象徴であるヤマトノヲロチを殺すことで秩序化し、この後オホクニヌシによって豊かな土地に変えられる土台を築いている。

スサノヲ3-d 武器を発見・アマテラスに献上

スサノヲがヤマトノヲロチを倒した際、蛇の尾を切ると、スサノヲの剣の刃が欠け、蛇の尾から一振りの剣が出て来た。スサノヲはこれを不思議なものだと思ってアマテラスに献上した。

3の類似

日本神話においては、スサノヲの竜退治と武器獲得、その武器のアマテラスへの献上は一連の流れで語られている。インドでは、シヴァの悪魔退治とアルジュナへの武器の授与は全く別系統の話である。しかし、両者ともに、悪魔退治という英雄的行為と、武器の献上・授与という、いずれも戦士機能に関連する働きをしている。

4. 荒ぶる神・罰・(宥め)

シヴァ4-a ダクシャの供犠／弓が折られる／宥められる

シヴァがダクシャの供犠を破壊するという話が、『マハーバーラタ』に語られている⁶⁾。

クリタ・ユガの終わりに、神々は祭祀を实行しようと思つて、ヴェーダの規定にしたがつてその準備を進めていた。その時、創造神の一人ダクシャは、獣を犠牲として捧げる儀式を行い、ヒマラヤ山頂の、ちょうどガンジス川が落下しようとする地点でそれを実行した。神々は自分たちだけで祭祀の供物の分配を行ったが、彼らはシヴァをよく知らなかったので彼には分け前を与えなかった。

そこでシヴァは激怒して弓を携えて犠牲式を行った場所に赴くと、ただちに山々は振動し始め、風は吹くのをやめ、火は燃えなくなり、星は恐れて姿を消し、太陽の光輝も月の美しさも去り、真の暗闇が空を満たした。シヴァは祭式の真っ只中を矢で射ると、祭式は牡鹿の姿に変身して、火の神アグニとともに天界に逃れた。シヴァは激怒のあまりサヴィトリ神（太陽神の一）の両腕を挫き、プーシャン（やはり太陽神の一）の齒を折り、バガ神（祭式における「分け前」の神）の両目を抉り出した。神々はあわてて祭式の準備をそのまま置き去りにして急いで逃れ去つたが、シヴァはそれを見て嘲笑した。しかしシヴァの弓は神々の呪いによって裂けてしまった。

その後神々はシヴァ神を捜し求め、彼を宥めることにした。そこでシヴァは怒りを和らげ、弓を海に投じ、バガには両目を、サヴィトリには両腕を、プーシャンには齒を回復してやった。それ以後彼は儀式の分け前を受取ることが出来た。

スサノヲ4-b 高天原での悪戯／爪などを切られて追放

このようなシヴァの乱暴な行いと比較できるのが、スサノヲの高天原における悪戯である。

スサノヲはアマテラスとのウケヒに勝つと、勝ちに乗じて高天原で様々な悪戯をした。アマテラスの田の畔を壊し、田に水を引く溝を埋め、アマテラスの神殿に糞をして汚した。アマテラスがスサノヲをかばったので、スサノヲの悪戯は激しくなり、ついには、アマテラスが機を織る機屋に、逆さに皮を剥いだ馬を投げ入れた。これに驚いた機織女が梭で自らの陰部を突いて死んでしまった。アマテラスは怒って岩屋に籠った。神々の祭りによって宥められ、アマテラスが岩屋から出てくると、スサノヲは贖罪の品物を課され、髭と手足の爪を切られて追放された。

4の類似

シヴァによるダクシャの供犠の破壊にしても、スサノヲの高天原での悪戯にしても、聖なるものを荒らすという共通点がある。さらにその結果、弓が折られたり、爪などを切られて追放されるなど、罰を受けているところも似ている。

5. 暴風神

シヴァ5-a 前身ルドラは暴風神

『リグ・ヴェーダ』におけるシヴァの前身・ルドラについては、『神の文化史事典』の「ルドラ」の項目に次のように記されている⁷⁾。

『リグ・ヴェーダ』の暴風神。赤褐色で、黄金の飾りで身を装い、弓矢で敵を屠る。雷を象徴する金剛杵を持つこともある。暴風雨神群マルトの父でもある。一般に破壊と恐怖の神とされるが、その一方で病

を治癒する神でもあり、彼の医療によって百歳の長寿に達することが祈願された。『リグ・ヴェーダ』においてはそれほど重要な神ではないが、後世シヴァとしてヒンドゥー教の主神となった。(後略)

スサノヲ5-b 暴風雨神

スサノヲはイザナキが禊をしたときに、イザナキの鼻から誕生しているが、このことは、世界各地の神話における「世界巨人型」創世神話において、殺された巨人の鼻から風が生まれたことと同じ意味を持つ。たとえばインドの『リグ・ヴェーダ』10, 90, 13では、原人プルシャの鼻から氣息が生じたとされている。つまりイザナキの鼻から生まれることで、スサノヲに風としての本質が認められることが明示されている。

5の類似

暴風神ルドラは破壊の神であり医療の神でもあるという、両義性が認められる。その両義性は、おそらく自然現象としての暴風（雨）に由来するものであろう。荒れ狂う暴風雨は恐ろしいが、豊穡をもたらしもする。このような自然の二面性が、後のシヴァにも受け継がれ、破壊と生殖という二面性を表すようになったのかもしれない。スサノヲも暴風雨の神として、荒れ狂えば世界を危機にさらすが、英雄的行いによって世界に秩序をもたらすこともあるという点で、やはり両義的な側面がある。

6. 文 化

シヴァ6-a 踊り

シヴァの踊りとその意味については、立川武蔵が的確に指摘しているので、少し長くなるがその箇所を引用する⁸⁾。

ところで、シヴァは「舞踏の王」(ナタ・ラージャ)と呼ばれるが、この場合の舞踏とは世界のなかの生命エネルギーの躍動をいう。すでに述べたように、シヴァは生命力を象徴する神である。リングという相を採ること自体、生命力、生殖力の神であることを表している。「世界のなかの生命エネルギー」という表現は、ヒンドゥー教にとって正しくないだろう。というのは、世界と生命エネルギーとが別個のものであって、世界という器の中にエネルギーが存在するというようにヒンドゥー教では考えられないからだ。世界そのものがエネルギーなのである。エネルギーのダンスが世界という姿を採るという方が、ヒンドゥー的、インド的であろう。

踊るシヴァは、世界という舞台の上で踊っているのではない。踊るシヴァ自身が舞台であり、踊り手であり、さらに観客でもあるのだ。つまり、踊るシヴァ自身がこの世界という姿を採っているのである。世界のもろもろのものを見ているわれわれ人間も、見られているものも、すべてがエネルギーの躍動なのであり、その総合体をヒンドゥー教は踊るシヴァと理解したのである。

スサノヲ6-b 歌

最初の和歌を詠んだのはスサノヲである。出雲でヤマタノヲロチ退治をしたのち、須賀の地に宮を建てた時に詠んだのが、次の歌である。

八雲立つ 出雲八重垣 妻ごみに 八重垣作る その八重垣を

盛んに湧き出る雲の様子を見てスサノヲはこの歌を詠んだ。このように最初の和歌を詠むことによって、スサノヲは文化の創始者としての側面も見せている。

6の類似

シヴァの踊りは世界のエネルギーそのものであり、スサノヲの歌は雲という形で表れた世界のエネルギーを詠み込んだものである。このように、世界の生命力を表現し鼓舞する意味を持つ文化と関連するという点で、シヴァの踊りとスサノヲの歌はよく似ていると言える。

7. 女性的なものとの一体化

シヴァ7-a 妃たちとシャクティ

6, 7世紀頃、インドでは女神崇拝が盛んとなり、女神は男神の力・シャクティとみなされるようになった。このような女神崇拝とシヴァ信仰が統合し、女神たちとシヴァの密接な関係が形成された。特にシヴァは妃神との関連が強い。妃サティーを亡くした時のシヴァの深い悲しみは、次のように物語られている⁹⁾。

シヴァがサティーの死体を肩にかついで国中を回って死の踊りを踊ったので、世界は破滅しそうになった。そこでヴァिशヌがサティーの死体を切り刻んだ。その破片は各地に散らばり、そこから多くの女神が誕生した。

このサティーは、後にパールヴァティーとして生まれ変わり、再びシヴァと結婚した。そのパールヴァティーとシヴァの深い結びつきが見て取れるのが、エローラ第16窟の、右半身が男性で左半身は女性の浮き彫りである。これは「半身ずつの女とイーシュヴァラ」と呼ばれており、右がシヴァ、左がパールヴァティーで、両者の結合、本来的な同一性を表現している¹⁰⁾。

スサノヲ7-b 母、姉、娘への執着

記によれば、スサノヲはイザナキの襖から生まれてすぐ、海原の支配を委ねられる。しかしスサノヲは、髭が胸に垂れ下がるような年頃になっても、任された国を治めようとせず、激しく泣き喚いている。そのために世界は無秩序状態に陥る。イザナキがわけを尋ねると、「根の国の母のもとへ行きたくて泣いている」と言うので、イザナキはスサノヲを追放した。

このような泣き喚くスサノヲについて、吉田敦彦は次のように述べている¹¹⁾。

つまりスサノヲは生まれるとすぐ、父から果たすべき重大な職務を与えられた。つまり責任ある大人として任務を果たすことを求められたわけですが、そうすることを拒否し、だだっ児のようにいつまでも、死んで冥府にいる母のもとに行きたいと言ってわあわあ泣きわめき、世界を大混乱に陥れたというのですから、このスサノヲの振舞はまさに母からの分離に抗議し、無理矢理母に固着しようとするもので、レヴィ＝ストロース流に言えばバイトゴゴ的であると言えましょう。

イザナキに追放されるとスサノヲは、姉のアマテラスへの思慕に憑りつかれ、アマテラスに会うために、世界を鳴動させながら高天原に昇っていく。このスサノヲの行動も、親族の女性に対する執着、突き詰めて言えばマザー・コンプレックスの表れである。スサノヲは娘のスセリビメに対しても、尋常でない執着を表す。スセリビメは、根の国を訪れたオホクニヌシを一目見て気に入り、すぐに結婚した。するとスサノヲは、オホクニヌシに様々な試練を課し、殺そうとまでして、娘を手放すまいとしている。このように、母、姉、娘という親族の女性に対して強い執着を持っているのがスサノヲであり、彼の物語は親族の女性との関連なしには成り立たな

いのである。

7の類似

シヴァは妃神と一心同体であり、妃神を失った時の悲しみによって世界を危機にさらした。スサノヲは、母・姉・娘という親族の女性への執着が強く、特に母神との合一を求め、最終的には根の国の支配者となることでその願望を叶えている。どちらにしても、家族の女性に対して強く同一性を持つという点に、両神の類似を見ることができる。

8. イニシエーションを受ける

シヴァ8-a アルジュナにイニシエーションを受ける

シヴァがパランダヴァ五兄弟の三男で、随一の戦士であるアルジュナにイニシエーションを課し、武器を授ける話が『マハーバーラタ』にある¹²⁾。

パランダヴァの二度目の放浪の旅の途中、ユディシュティラは弟のアルジュナに、インドラ神のもとで武器を得てくるように命令する。アルジュナは弓と矢で武装して出かけた。彼がヒマラーヤ山とガンダマーダナ山を越えた時、虚空から「止まれ」という声が聞こえた。そしてアルジュナは樹の根元に光輝く一人の苦行者を見た。この苦行者こそ、インドラ神の変身したものであった。彼が願い事を叶えてやると告げると、アルジュナは「あなたから全ての武器を学びたい」と願った。インドラは次のような条件を課した。

わが子よ、もしおまえが生類の主、三眼を持つ者、槍を持つシヴァを見たら、私はおまえに神的な武器をすべて与えよう。シヴァ神を見るために努力せよ。クンティーの息子よ、彼を見ることによって

おまえは目的を完遂し、天界へ行くだろう。(3, 38, 43-44)

アルジュナはシヴァに会うために、ヒマラーヤの森の中に入った。その時、法螺貝と太鼓の音が天空に鳴り響いた。アルジュナはその森で激しい苦行を行った。最初の一カ月は、四夜ごとに木の実を食べて過ごした。次の一カ月は、六夜ごとに木の実を食べて過ごした。三カ月目は、十四日ごとに地に落ちた葉を食べて過ごした。四カ月目になると、断食して、足の親指で立ったままで過ごすという苦行をした。この苦行に満足したシヴァは、狩猟民であるキラータの姿を取ってアルジュナの前に姿を現した。その時、猪の姿をしたムーカという名の悪魔がアルジュナを殺そうとしていた。アルジュナはそれに気づいて弓矢を取って射た。同時にキラータ（シヴァ）も、その猪を射た。多くの矢に射られた悪魔は恐ろしい羅刹の姿に戻って死んだ。アルジュナは、自分が先に射ようとした羅刹をキラータも射たことに対して、「狩猟の法に反する」として怒った。こうして両者の間に激しい戦闘が行われた。二人はまず弓矢で戦った。キラータは、アルジュナの必殺の武器であるガンディーヴァの弓から放たれる矢を、平静に受け止めて無傷で立っていた。これを見たアルジュナは驚嘆し、自分が相手にしているのがシヴァ神その人なのではないかと考えた。アルジュナは矢による攻撃を続けたが、矢が尽きてしまったので、次には刀で戦った。アルジュナが刀をキラータの頭に打ち下ろすと、刀は砕け散ってしまった。最後にアルジュナは、自らの拳でキラータの姿をした神を打った。キラータも、拳でアルジュナに応戦した。二人の戦いはしばらく続いた。やがて、キラータはアルジュナの身体を押しつぶして、彼の気を失わせた。アルジュナはキラータによって「団子 (pinḍī) のように (3, 40, 50)」されてしまった。この戦闘に満足したシヴァは、

自らの姿を現した。アルジュナは光輝に満ちた神の姿を見て許しを請うた。シヴァは彼を許し、願い事を叶えてやると告げた。アルジュナは全世界を滅亡させる必殺の武器「ブラフマシラス」を望み、習得した。シヴァが去ると、アルジュナのもとにヴァルナ、クベーラ、ヤマがインドラとともにやって来て、それぞれがアルジュナに武器を授けた¹³⁾。(3,38-42)

スサノヲ8-b オホクニヌシにイニシエーションを授ける

オホクニヌシがスサノヲに課された試練の内容については、2-b 参照。その試練の意味は、古川のり子によって次のように解釈されている¹⁴⁾。

根の国においてもオホナムチは、スサノヲによる試練をくぐり抜けることで、地上にいたときと同様に死と再生を繰り返す。オホナムチはここでは、蛇の室、ムカデと蜂の室、土中の壺のような形のほら穴、八田間の大室というような、母胎を思わせる閉ざされた空間に籠っては出るという行為を繰り返し行っている。これらの空間は、蛇やムカデや蜂の群れがそこにうごめいていたり、毛髪中にたくさんのムカデを発生させたスサノヲがいたり、あるいは子ネズミをひき連れた親ネズミが司っているなど、どれもが混沌とした空間である。かつてアマテラスがいったん死んで天の石屋の中に閉じ籠り、そこから再び出現することでより尊い女神へと生まれ変わったように、オホナムチもこれらの子宮的な空間からの再生を繰り返すことによって一人前の大人へ、より偉大な神へと成長を遂げていく。三度目の野焼きの試練のあとに、オホナムチが地中の空洞の中から鑄矢という「収穫物」を手にして現れたとき、彼はすでに地上にいたときよりは、はるかに成長を遂げていたものと思われる。

8の類似

シヴァとの戦闘において、アルジュナは「団子」のように丸められた、とされている。これは彼が胎児のような状態に戻されたことを意味していると考えることができる。アルジュナは一度胎児の状態に戻り、象徴的な死を経験して、そこから再び生まれ変わることで、神々の武器を使いこなせるような、さらに強力な戦士となることができたのである。スサノヲも、オホクニヌシを子宮を暗示する閉ざされた空間に閉じ込めることで、オホクニヌシを胎児の状態に戻し、そこから出てくることで再生を果たすという試練を課した。

おわりに——なぜ似ているのか

本稿ではインドのシヴァ神と日本のスサノヲ神の比較をし、八つの類似点を抽出した。しかしこの比較には重大な問題がある。両神の性質が確定した年代の問題である。

本稿で取り上げたスサノヲの諸側面は、『古事記』が書かれた段階で固定された性質である。一方、シヴァは、古い要素で紀元前1200年の『リグ・ヴェーダ』、新しい要素でシャクティ思想が出現する紀元後6、7世紀と、非常に長い期間にわたり、次第にその複雑な性質が形成されていった。したがって、両神の性質の類似から、何らかの系統的な関連を立証することは不可能である。本稿ではただ、偶然の一致とするにはあまりにも似ている、「奇妙な類似である」と述べるにとどめる。

注

- 1) 以下、『古事記』の引用は次田真幸全訳注『古事記』上、講談社学術文庫、1977年を用いた。
- 2) 吉田敦彦・古川のり子著『日本の神話伝説』青土社、1996年、124頁。

- 3) ハインリヒ・ツインマー著, 宮元啓一訳『インド・アート〔神話と象徴〕
せりか書房, 1988年, 5-18頁を参照した。
- 4) 『タイツィーリヤ・サンヒター』6, 2, 3, 1-2. 上村勝彦『インド神話』
東京書籍, 1981年, 42-43頁を参照した。
- 5) 『マハーバーラタ』8, 24. 上村勝彦『インド神話』42-46頁を参照した。
- 6) 『マハーバーラタ』10, 18. 中村元『ヒンドゥー教と叙事詩』春秋社,
1996年, 423-424頁を参照した。
- 7) 松村一男, 平藤喜久子, 山田仁史編, 『神の文化史事典』白水社, 2013年,
「ルドラ」(沖田執筆項目)。
- 8) 立川武蔵著, 木村次郷写真『シヴァと女神たち』山川出版社, 2002年,
92-93頁。
- 9) 『世界女神大事典』「サティー」(インド) 沖田執筆項目。原書房, 2015年。
- 10) 立川武蔵著, 木村次郷写真『シヴァと女神たち』山川出版社, 2002年,
99-100頁。
- 11) 河合隼雄・湯浅康雄・吉田敦彦『日本神話の思想 スサノヲ論』ミネル
ヴァ書房, 1983年, 20-21頁。
- 12) 『マハーバーラタ』の訳はプーナ批判版を用いた。
- 13) デュメジルもこの話をアルジュナのイニシエーションとして分析している。
Jupiter Mars Quirinus IV, Gallimard, 1945, pp. 69-73.
- 14) 吉田敦彦, 古川のり子著『日本の神話伝説』青土社, 1996年, 121頁。

